THE ANNUAL REPORTS OF
HEALTH, PHYSICAL EDUCATION
AND SPORT SCIENCE
VOL.32, 39-51, 2013

原　著

〈原理〉から〈哲学〉へ：〈生き方としての体育哲学〉に向けた序論

From *Principles* to *Philosophy*：An introduction to "Philosophy of PE as a Way of Life"

林　洋輔

Yosuke HAYASHI

ABSTRACT

This study will define what the "philosophy" is in the field of "Philosophy of Physical Education". The main focuses of the investigation are references on René Descartes and Pierre Hadot. Although the name has changed from the "Principles of Physical Education" field to that of "Philosophy of Physical Education," up until now, the difference between "principle" and "philosophy" has remained obscure among researchers. Therefore, I think it is of benefit to consider the difference of the respective concepts from the perspectives of Descartes and Hadot.

Firstly, there is considered to be a large difference in the semantic content of "Principles of Physical Education" in Japan and the West (America). In Japan, "Principles of Physical Education" researchers went about their research using philosophical methods exclusively. Furthermore, what they set out to define was epistemological, or otherwise basic knowledge in physical education and Sport. On the other hand, the "philosophy" which Descartes indicated in 'Principles of Philosophy' was the study of wisdom and he comments that wisdom means prudence in our everyday affairs and a perfect knowledge of all things that mankind is capable of knowing. Furthermore, according to Hadot, in ancient times, "philosophy" referred to the core way of living rather than the aim of systemization. In conclusion, philosophy is not just the pursuit of systemization and of principle theory knowledge; at its core, it refers to the knowledge concerned with 'how we live.' Therefore, from now on, researchers of "Philosophy of Physical Education" should provide practical knowledge to the people who deal with the various problems of Physical Education and Sport. More enlightened discussion can ensue on the concept of philosophy in the field of "Philosophy of Physical Education".

Key words; René Descartes, Pierre Hadot, Principles, Philosophy

国士舘大学体育学部付属体育研究所
(Institute of health, physical education and sport science school of physical education Kokushikan University)
筑波大学体育系（Faculty of health and sport sciences, university of Tsukuba）

本研究では、体育哲学分野における「哲学」の実質が明らかにされる。考察においてはルネ・デカルトおよびピエール・アドの言及が主な考察対象となる。「体育原理」分野から「体育哲学」分野への名称の変更が行われたものの、現在まで研究者のあいだでは「原理」と「哲学」との差異は不明瞭なままである。そこでデカルトおよびアドの視点から当該の概念の差異を考えてみるのも有益であろう。

まず日本と欧米（アメリカ）においては「体育原理」の意味内容については大きな差異がみられた。そしてわが国の「体育原理」研究者はもっぱら哲学的方法を用いて研究を進めてきた。さらに、彼らが明らかにしようとしたものは体育やスポーツの場における認識論的もしくは基本的な知である。他方、デカルトが『哲学原理』において指摘した「哲学」の実質とは「知恵の探求」であり、それは完全な知識を指すばかりではなく日常生活の分別をもその意味内容として含むなど、主体の実益の供することを旨としたものであった。さらにアドによれば、古代において「哲学」とは体系化を志向するものというよりは主体の生き方を指し示すものであった。結論として哲学とは体系化や原理論的な知を追及するばかりではなく、主体に対して「いかに生きるか」にかかわる知を指し示すものである。それゆえ体育哲学の研究者も以後は体育・スポーツの諸問題に取り組む人々に実践的な知を提供することが求められる。さらなる議論が体育における「哲学」の概念をめぐり、打ち続くことになるだろう。

Ⅰ　は　じ　め　に

身体教育（体育）についての哲学的考察を主な責務とする「体育原理」分野は、周知のように、2005年度からその名称を「体育哲学」分野と改称した。この改称の背景としては、「体育原理」分野における研究史の実質がひとえに哲学的な思索を手段として蓄積されてきたことに存するとみてよいであろう。それゆえ、このような名称の変更を不自然なものと批判することは一見困難である。しかしながら、体育の〈原理〉から体育の〈哲学〉と名称が変更したことによって、その研究内容の実質はどのような変容を遂げたであろうか。なるほど、名称の変更を通じていわば劇的に研究分野としての性格が変容することは考えにくいであろう。なぜなら、名称の変更が見られたとはいえ〈体育原理〉の研究者はまた現在〈体育哲学〉の研究者なのであって、引き続き分野の特性を踏まえた研究が行われているからである。しかしながら他方、次のような批判の提出も可能であろう。すなわち、〈原理〉と〈哲学〉とのあいだで概念上の差異が存するならば、当然のごとく単に名称が変更されるばかりではなく、その研究内容の実質についても何らかの変容が認められるべきではないかとする批判である。むろん分野の研究内容における実質が〈哲学〉であるから名称も〈体育哲学〉に変更されたとする指摘は説得性を有するとは言えるだろう。しかしながら、むしろわれわれは今〈体育哲学〉分野における〈哲学とは何か？〉と問い始める時宜を迎えているのではないだろうか。というのも、〈原理〉と〈哲学〉との概念上の差異を明らかに見定めることは、この分野の学的性格を明らかにするものであるばかりではなく、〈哲学とは何か？〉という古来から存する問いを体育学的にとらえ直す契機としても課題としての意義が認められるからである。そこで本稿では〈体育原理〉と〈体育哲学〉との概念上の差異を明瞭にするとともに、体育における〈哲学〉とはどのような実質を持つもの――あるいは持つべきもの――であるかについても明らかにする。このことを本稿の回答すべき問いとして問題を設定する。また着眼点としては、まずこれまで〈体育原理〉がどのようなものとして位置づけられてきたのかについて、〈体育原理〉分野における主な論者の見解を瞥見し、この分野における学的性格の見定めを行う。次に、現在の学問観および世界観の祖型を構成したルネ・デカルト（René

Descartes 1596-1650）における『哲学原理』を参照し、彼が『原理』や『哲学』といった諸概念に対して有していた理解を整理するとともに、体育における〈哲学〉概念の解明に資する知見を抽出する。続いて当該の議論で明らかとなるデカルトと古代哲学における〈知恵la sagesse〉概念の類似性を手掛かりとし、フランスの古代哲学史家であるピエール・アド（Pierre Hadot 1922-2010）の議論を参照しながら〈哲学〉概念についての理解を深めていく。結論部では以上のことごとを総合し、〈体育哲学〉における〈哲学〉の実質を明らかにする[注1)]。

Ⅱ　体育原理とは何であったか

すでに明らかにされているように、わが国で「体育原理」と呼ばれてきた分野の名称は、欧米語の「Principles of physical Education」からの翻訳語である[注2)]。しかしながら、佐藤が指摘するように、この〈体育原理〉とはわが国と英語圏との間においてその意味内容の大きく異なるものである。すなわち、一方でわが国の〈体育原理〉とは、以下でやや詳しく論ずるように〈体育〉――さらにはその教材としてのスポーツ、あるいは体育の場における〈身体〉――についての哲学的考察を専らの責務として負うものである。しかしながら他方において欧米では「『体育諸科学』と『体育実践』とを媒介する知識・知見の集合体であり（…）、体育諸科学がすでに明らかにしている研究成果を体育実践にできるだけ有効に役立てるため、利用・活用の見地からアプローチしていく、いわば『技術』的性格を持つ領域」とされている[注3)]。つまり、「体育原理Principles of physical Education」という学問分野は、欧米においては体育に関係する諸学のうちに生まれたもろもろの研究成果を体育実践といういわば〈教育現場〉における有用な知見として活用させるための媒介を担う学問であったということになる。しかしながら、わが国で蓄積された〈体育原理〉の研究史――当該の研究史を〈体育哲学〉の研究史と呼称してよいか否かという問いについては別途に議論がなされねばならないであろうが――をひとたび紐解いて見るならば、その歴史は身体教育すなわち〈体育〉をめぐる諸概念の原理論的な考察が展開されている。たとえば20世紀初頭における高島の『体育原理』によれば、その著作において論じられているものは、「体育」の必要性が〈幸福〉や〈経済〉そして〈教育〉といった諸概念との関係において論じられているのであるし[注4)]、「体育の目的」といった教育の目標論に加えて「心身相関論」、言うなら「精神の身体に及ぼす影響」などの哲学分野における〈心身関係論〉に関する検討が行われている。端的に述べるならば、わが国のとりわけ戦前における「体育原理」とは、少なくともその草創期においては体育をめぐる諸概念についての哲学的検討を行う分野であったと指摘することができるのである。

ところで、上で確認したような「体育原理」の学的性格は、戦後に至ってもその位置づけはほぼ不動のものとして捉えることができる。たとえば、川村は〈体育原理〉の学問的な位置づけについて以下のように言及している。

（…）教育がその基礎に教育哲学を必要とすると同じく、体育においてもまた体育哲学を必要とすると考えられる。体育の原理は、体育の基礎的諸科学の事実に基づくものでありながら、しかもそれらの諸事実を「体育の目的」に照らして批判し統合するものであるとすれば、それは、「体育哲学」という意味を持つものというべきであろう[注5)]。

川村は、一方では体育原理分野の研究者として科学と哲学との関係にも関心を寄せており[注6)]、また他方では体育の意義や目的といった問いに対して検討を加えるとともに上に挙げたような自らの属する〈体育原理〉分野の学的性格についても言及をくり返している。それによれば、〈体育の

原理〉――つまりは〈体育原理〉という学問――とは自然科学の諸分野との関係を踏まえつつ、体育に対する哲学的な考察、つまり〈体育哲学〉として解釈されうる旨を指摘する。すなわち、〈体育原理〉とはそのまま〈体育哲学〉として捉えるべきことが明示されている。また同じ体育原理分野の研究者である前川も、体育原理という研究領域が〈体育本質論〉や〈体育目標論〉といった問いに答えるべきものであることを指摘するとともに、〈身体の哲学的考察〉あるいは〈体育の定義〉といった議論に対して考察を加えている[注7)]。すなわち、前川においても〈体育原理〉とは体育に対する哲学的な考察――つまりは〈体育哲学〉――をその主務とすべきことが指摘されている。これらの体育原理分野における有力な研究者であった前川や川村の指摘からも了解されるとおり、〈体育原理〉と〈体育哲学〉はほぼ実質的にその意味内容ならびに分野として取り組むべき論題という観点において軌を一にするものであったと総括できるであろう。

さて、〈体育原理〉から名称の変更された〈体育哲学〉分野では、これまで確認してきたような思想的潮流についてどのような変容が生まれたのであろうか。この問いについて言えば、現在の〈体育哲学〉分野においては〈体育原理〉分野のこれまでにおける研究史を継承しつつ、依然として〈原理論〉的な知を求める考察が続けられているように思われる。たとえば近年の〈体育哲学〉における研究成果を見渡してみれば、一方では体育という営みを通じて主体を教育することの（不）可能性――伝統的に〈人間形成論〉と呼ばれてきたもの――についての検討が任意の哲学者に対する思想研究を交えて行われている[注8)]。また他方では体育における主体の〈身体〉そして〈心身関係〉のありさまをめぐる議論が行われている[注9)]。そして体育における教材としての〈スポーツ〉を科学論との関連においてとらえ直した研究も確認される[注10)]。これらの研究はいずれも体育やスポーツ、そして主体の身体や心身関係についての原理論的な知見を明らかにするものである。しかしながら、それらの成果はなおいずれも〈原理論〉としての知を求めるものであって、それはまた体育学における基本的な諸概念の実質を明らかにしようと試みるものに留まる。すなわち、〈原理〉と〈哲学〉を同趣旨のものと捉える思潮がなおも伺えるのであって、〈体育原理〉分野の後続としての〈体育哲学〉もまた、〈体育原理〉から引き継いだ研究史の性格を色濃く帯びたものといってよいだろう。なるほど〈体育原理〉から〈体育哲学〉へと名称が変更されたとはいえ、元来〈体育原理〉分野の研究者に期待されていた役割がそのまま〈体育哲学〉と名称変更された分野にも引き継がれるのであれば、ことさらその研究内容の実質について批判を加えることが適切であるかについては吟味されねばならない。というのも、これまでわが国と欧米とでその意味内容に齟齬の見られた〈体育原理〉という名称について、わが国の場合はより研究内容の実情に近づく名称に変更したとすることで議論の収束も可能だからである。しかしながら、〈体育原理〉の研究者たちはどのような〈哲学〉を構築してきたか、あるいは今後構築することになるのだろうか。もし〈体育哲学〉という名称に変更されたところでその研究内容が専ら体育やスポーツ、そして身体についての原理論的な知の追求に留まるものであるならば、ことさら名称を〈体育原理〉から〈体育哲学〉などと変更する意義も薄れることとなる。なぜなら、分野の名称を変更するとは、単に研究内容の実質についての整合性の是非ばかりではなく、その名称の基底詞となる〈原理〉と〈哲学〉との差異についても考察の眼が及ぼされねばならないからである。そこで〈体育哲学〉における〈哲学〉とは一体どのような意味内容を有するのかという問いが立ち現れてくることになるだろう。もっとも、〈哲学とは何か〉という問いについては早急な回答を与えることが困難であることは論を待たない。たとえば、辞書的な定義を確認してみても「一義的な仕方manière univoque」での同

定は困難であり、それゆえ「古代ギリシャのうちに生まれた西洋的思考の潮流として、時空のうちに位置づけられることで存立するconsisterait à la［la philosophie］situer dans l'espèce et le temps, comme un courant de pensée occidental qui serait né dans la Grèce antique」ことが条件として挙げられるに留まっている[注11)]。要するに、〈哲学とは何か〉と問いを提起してみたところで、その議論に十全な形で答えることはほとんど不可能といっても過言ではないだろう。しかしながら、〈哲学〉の意味内容に充足的な回答を与えることは困難であるにせよ、体育におけるこの概念――つまり体育における〈哲学〉の概念――の実質を同定するための何らかの指針については考察を深めることができるのではないか。すなわち、〈体育哲学〉における〈哲学〉の実質についての検討を進めるうえで、その手がかりとなる議論を参照することで、向後の議論――すなわち〈体育哲学における『哲学』とは何か〉という問い――の端緒を示すことはできるのではないだろうか。というのは、今挙げた問いに対する暫定的な回答を与えることにより、向後の発展的な議論に対する先鞭をつけることは可能だからである。それでは、その端緒となる議論についてはどのように考えればよいのだろうか。この問いに対しては、〈科学〉に対する体育原理の研究者たちの関心に着目したい。というのも、先に言及された川村のように、〈体育原理〉そして〈体育哲学〉の双方において〈科学〉に対する研究者の関心は継続しているばかりではなく、現在の世界観あるいは科学観の上に立って体育という教育が行われているのならば、その思想的基盤において〈哲学〉がどのように捉えられていたかについて考察することは着眼としても有益と考えられるからである[注12)]。そこで現代に至る世界観そして科学観を基礎づけたルネ・デカルト（René Descartes 1596-1650）の著作『哲学原理*Principia philosophiæ*』仏訳（1647）の序文における〈哲学Philosophie〉理解を検討してみたい。なぜなら、この著作の言及において〈哲学〉の実質および現代の自然科学との関係について詳細に論じられているからである。

Ⅲ　デカルトにおける〈哲学〉理解

はじめに、デカルトにおける『哲学原理』の位置づけについて述べておこう。すでに指摘されているように[注13)]、デカルトは生前に四冊の著書を公刊した。すなわち、1637年における『方法序説*Discourse de la méthode*』、1641年にその初版が出版された『省察*Meditationes de prima philosophia*』、1644年にラテン語初版――そして1647年には以下で詳解する序文の付された仏訳――として出版された『哲学原理*Principia philosophiæ*』、そして最晩年の1649年に上梓された『情念論*Les Passions de l'âme*』の四つである。これら四冊の著作のうち、『哲学原理』はそれまでのデカルト哲学の〈大全Summa〉であるとも言われる[注14)]。すなわち、当時のスコラ哲学に対抗する含意を踏まえることでデカルトは自らの思索の集大成として――そして教育用テキストとして――『哲学原理』を江湖に問うたことが知られている。なるほどこの著作はデカルト自身の当初の意図には必ずしも沿うものとはならなかったものの[注15)]、デカルト哲学を体系的な視点から捉える上では有益な示唆を読者に多々もたらすものとの評価は不動であるといっても過言ではないだろう。言ってみればデカルト哲学の〈粋〉の凝縮された著作がこの『哲学原理』であるとひとまずまとめることができるのである。

さて、この『哲学原理』の仏訳に付された序文において、デカルトは自らの従事する〈哲学〉がどのようなものであるかについて、その実質を詳述している。すなわちデカルトによれば、〈哲学〉とは次のようなものである。

（…）「哲学」ということばは知恵の研究l'étude de la Sagesseを意味し、知恵とは単に日常生活の分別la prudence dans les affairesのことだけでは

なく、自分の生活を導くためpour la conduite de sa vieにも、健康の保持やあらゆる技術の発明la conservation de sa santé et l'invention de tous les artsのためにも、人が知りうるあらゆることがらについての完全な知識une parfaite connaissance de toutes les choses を指すこと[注16)]。

デカルトによれば、哲学とは「知恵の探求」である。そしてその知恵とは日常生活における分別といった実践的な知を指すばかりではなく、自らの生活を律する認識についてもその含意が適用されるとともに、健康の保持や技術の発明もまた、〈知恵〉の実質に含まれることが読み取れる。そしてこのような知識が完全なものとなるためには、それが「第一原因から導き出されることが必要il est nécessaire qu' elle［une parfaite connaissance］soit déduite des première causes」であり[注17)]、その獲得に努めること――つまり〈知恵を探求すること〉――が「本来哲学すると言われているse nommer proprement philosopher」ことなのである[注18)]。ところで、デカルトによる当該言及においてとりわけ着目すべきことは、次の二つである。第一に、〈知恵〉の実質がいわば実践的な有用性を強く含みもつことである。すなわち、日常生活に有益なもろもろの知識の獲得や技術の発明など、主体――つまり任意の人間――の実生活に裨益する知が〈知恵〉であり、その〈知恵〉を探求することが〈哲学〉であるとされる。それゆえデカルトの言及に従うならば、〈哲学〉とは主体が生を営む上での有為な知を探求することにその実質が求められるのであって、『方法序説』第六部におけるデカルトの含意が受け継がれていることが読み取れる[注19)]。なぜなら、『方法序説』においてもまた、自らの思索が思弁的なものにとどまるものではなく、公共の福祉に資するものであることがはっきりと打ち出されているからである。他方、 着目すべきことの第二として、「原理 des Principes」の位置づけを指摘することができる。デカルトによれば、哲学するためには第一の原因つまり原理の探求からはじめなくてはならないとされる[注20)]。そしてこの原理の成立条件として、以下の二つのことが指定される。すなわち、第一に「原理がきわめて明晰かつ明証的si claires et si évidentesであって、人間精神l'esprits humaineがそれらを注意深く考察しようとするときには、その真理性vérité を疑うことができないほどであること」[注21)]、第二に、他の事物の認識がそれらの原理に依存し、したがって原理は他の事物なしにも知りうるが、逆に他の事物は原理なしには知りえないce soit d' eux［Principes］que dépende la connaissance des autres choses, en sorte qu' ils puissent être connus sans elles, mais non pas réciproquement elles sans euxということ」である[注22)]。それゆえ〈哲学〉つまり〈知恵の探求〉の出発点として〈原理〉が位置付けられるのであって、デカルトによれば、「これらの原理から、それに依存している事物の認識を演繹するよう努め、そこからなされる演繹の全過程toute la suite des déductionにおいては、きわめて明白なもの以外は何もないようにしなければならない」のである[注23)]。

ところで、デカルトにおける〈原理〉と〈哲学〉との概念的な差異は、翻って〈体育原理〉と〈体育哲学〉の概念的な差異についても示唆を投げかけるものではないだろうか。すなわち、デカルトのテキストにおいて示される通り、〈原理〉と〈哲学〉とは概念上その意味内容が異なるものである。すなわち、前者が哲学する上でのいわば出発点に位置づく認識論的な知であり、周知のようにデカルトにおけるそれは「この思惟があること、つまり存在すること l'être ou l'existence de cette pensée」である[注24)]。言い方を変えるならば、〈原理〉とは哲学の出発点であり、哲学の一部をなすものではあっても〈哲学〉と相即する概念ではありえない。他方、デカルトにおける〈哲学〉とはくりかえして言えば主体の日常生活における道標となる〈知恵〉の探求であり、その研究は「われわれの行動を律し、この人生において自分を導く

ために必要cette étude est plus nécessaire pour régler nos mœurs, et nous conduire en cette vie」なものである[注25)]。すなわち、〈原理〉をいわば足がかりとして〈知恵〉を求める探究過程が〈哲学〉なのであるとともに、〈哲学〉は〈原理〉をその一部として含むものである。むろん、現代における〈哲学〉の概念と、デカルトが17世紀も半ばに差し掛かるころに著作のうちで用いた〈哲学〉とでは、その意味内容に差異の存することが確認されねばならない。デカルトが述べる〈哲学〉のうちには自らの著作としての『屈折光学*la Dioptrique*』や『幾何学*la Géométrie*』も含まれる。このうち前者を著すことの意義とは、「人生の役に立つ技術の認識la connaissance des arts qui sont utiles à la vieにまでいたることができる」の明示であるのに対して[注26)]、後者を著すことの意義とは「これまで知られていなかった多くのものを私が発見したことを示して、人々がまだ他の多くのことを発見できると信じる機会を与え、こうして万人を真理の探求la recherche de la vérité へと誘うこと」であった[注27)]。要するに、両著作は現代の言葉でいえば〈社会貢献〉を前提としたものではあるが、いわば広義で捉えたうえでの〈哲学〉に含まれており、〈体育原理〉と〈体育哲学〉との差異に関して直ちにデカルトの知見を適用してよいかとの問いについては吟味が必要となろう。しかしながら、デカルトにおける〈原理〉と〈哲学〉の実質的な相違とは、「体育哲学における『哲学』とは何か」という問いを発する主体においても回答を提出するための手がかりを与えてくれるものとなる。すなわち、デカルトにおいて〈原理〉とは〈哲学〉に含まれる。つまり、〈哲学〉は〈原理〉をそのうちに含むものであり、〈原理〉を足掛かりとして主体の実生活に資する知識を探求する営みである。他方、その〈原理〉に該当するものがデカルトにおいては形而上学となり、〈知恵の探求〉としての哲学の道筋は、著名な次のたとえによって示されている。

（…）全哲学toute la philosophieは一本の樹のようなものです。その根は形而上学la Métaphysique、幹は自然学la Physique、その幹から伸びる枝les branchesは他のすべての諸学です。それらは三つの主要な学問trois principale、すなわち医学la Médecine、機械学la Mécaniqueそして道徳la Moraleに帰着します。ここで道徳というのは、他の諸学の完全な認識une entière connaissance des autres sciencesを前提とし、知恵の最高段階le dernier degré de la Sagesseである最高の最も完全な道徳のことです[注28)]。

デカルトは全哲学を一本の樹になぞらえ、〈原理〉としての形而上学から〈哲学〉としての諸学に対する思索――つまり〈知恵の探求〉――を進める。よく知られているように、終着点としての道徳は最晩年の『情念論』にも連なるものであり、理想的な主体のあり方としての「高邁の徳la Générosité」を体現した主体のあり方が構想される[注29)]。すでに〈人間学anthropologie〉としてデカルト哲学の体系をとらえ直す試みが見られることからも明らかなように[注30)]、〈原理〉に基づいて主体が自らの生を導く――そして実生活に資する知を求める――〈哲学〉がデカルトの志向した〈哲学〉であり、その成果とは常に主体の実践に向けられたものである。具体的に言えば、それは〈世界がどのようであるか〉という世界認識への問いに対する回答に加え、そのような世界認識を引き受けた主体がどのように生きるかという問いに対する回答がデカルトの考える〈哲学〉である[注31)]。ところで、現代にまでその影響の続くデカルト哲学のうちの〈原理〉と〈哲学〉との概念的な差異が明らかにされたのならば、〈体育原理〉と〈体育哲学〉との概念上の差異――つまり単に名称変更に留まらない両者の差異――についても見通しを得ることはそれほど難しくはないであろう。すなわち、〈原理〉を足掛かりとして〈知恵の探求〉としての〈哲学〉を遂行することが求められる。その〈哲学〉の実質は、デカルトが示唆

したように主体の実生活に資するものを含意した知の提供である。このような知見から総括的に論じてみると、〈体育原理〉から〈体育哲学〉への変容とは、単に名称の変更にとどまるものなどではなく、その概念上の差異に鑑みてもその実質の根本的な変革を分野内の諸研究者に要請するものであったと結論付けられる。そしてその結論とは、体育やスポーツなど主体の実践において有用となる示唆を与えるものとして、体育における〈哲学〉をとらえ直すことの必要性および重要性である。

しかしながら、以上のような議論によってもなお次のような問いを発することはできるであろう。すなわち、〈哲学〉が主体の実践に供するものであったとしても、それは具体的にはどのような枠組みを有するものであるのか。問い方を変えて言うと、デカルトの示唆にもとづいて体育における〈哲学〉を構築すると宣言したところで、その〈哲学〉の体育学的な実質はどのようなものであるか。このような問いに対しては、デカルトの考える〈哲学〉理解がどのような思想的背景を基として言及されたものであるのかという質問への回答が手掛かりとなる。周知のように、デカルトの哲学がアリストテレスの哲学に対する批判的な態度を通じて――むろんそれは1630年以降の思索であって、それ以前のデカルトの著作である『精神指導の規則*Regulæ ad directionem ingenii*』や『思索私記*Cogitationes privatæ*』の段階では未だ認められない性格ではあるにせよ[注32)]――形成されたことは、哲学史における初歩的な知見といっても過言ではない。しかしながら、先行研究でも指摘されたように、とりわけ形而上学における「知恵」の理解については類似のあることが確認されている[注33)]。つまり、一見対蹠的な位置にあるデカルトの哲学とアリストテレスの哲学とは、しばしば指摘される〈実体的形相substantial form〉における差異においてばかりではなく[注34)]、〈哲学〉の概念および〈知恵〉の概念についても等閑視の許されない類似を示していると言えるのである。それゆえ、デカルトの〈哲学〉理解における〈知恵〉の実質をさらに深めるためには、一見逆説的ではあるが、むしろ古代における〈哲学〉の概念の実質を見極める必要があるのではないだろうか。なぜなら、デカルトの〈哲学〉理解の根底には古代における〈哲学〉概念がいわば影を落としているのであって、古代哲学における〈哲学〉理解を見定めることでデカルトが〈哲学〉に込めた含意もより鮮明になるものと思われるからである。それゆえ次項では古代における〈哲学〉概念の実質を素描的に示すことから、〈体育哲学〉における〈哲学〉に含意されるべきものについての検討を進めよう。

Ⅳ 〈生き方としての体育哲学〉へ向けて

前項までの議論から、〈哲学〉の実質とは主体の実生活に資する知を含むものであることが示された。ところで古代哲学における〈哲学〉の概念を見定めるとはいえ、その実質を総括的に述べることは困難な作業となるだろう。それゆえ本節では向後の議論に向けた糸口をつかむ議論として、フランスの古代哲学史家であるピエール・アド（Pierre Hadot, 1922-2010）の議論を参照することにより、向後の議論における端緒が拓かれるように思われる。というのも、彼における古代哲学に対する解釈は、現代の体育哲学における〈哲学〉理解に対しても資するものがあると考えられるからである。

アドによれば、古代における〈哲学〉とは一つの「生き方la manière de vivre」であるとして、以下のようにまとめられる。

哲学とは世界のうちに存在する[主体の]あり方une manière d'exister dans le monde であり、またその都度実践されねばならないものqui doit être pratiquée à chaque instantであり、哲学の目標とは個人における生の全体を変革することtransformer toute sa vieである[注35)]。

アドにおいて、古代における哲学とは体系の構築を志向するものというよりは、〈生き方の実践〉として捉えられる。すなわち、哲学とは主体における生き方に対する態度に密着したものであり、とりわけ「知恵la sagesse」を求めることが哲学の目標となる[注36)]。この知恵とはそれによって、魂（精神）に「平穏や内的な自由、そして宇宙論的な意識la tranquillité de l'âme（ataraxia），la liberté intérieur（autarxeia），la conscience cosmique」をもたらすものである[注37)]。加えて哲学とは、「それ自身が治癒的なものであり、人間の不安を癒す意図をもつものse présentait comme une thérapeutique destinée à guérir l'angoisse」でもある[注38)]。すなわち、哲学とは主体の生に密接なかかわりを有するものなのであって、言うなれば哲学とは主体の生涯に変革をもたらすものとして位置づけられるのである。

ところで、このようなアドの古代哲学に対する理解に対し、次のような批判は容易に想起される。すなわち、通例は〈哲学〉のいわば中核をなす〈哲学的な言説le discourse philosophique〉とは古代においてはどのような位置づけを占めていたのか。問い方の表現を変えるならば、古代においては近代以降に見られるような言説の体系としての〈哲学〉は確認されなかったのか。むろん、そうではなく、多様な「学派l'école」において生まれたもろもろの言説の戦わされた事実を否定することは不可能であって、この限り古代においても言説の体系としての〈哲学〉は確認することができる。しかしながらアドによれば、「哲学的な言説とはその起源を［主体における］生の選択のうちにもつものLe discours philosophique prend donc son origine dans un choix de vie」であり、「実存的な選定であり、その逆ではないune option existentielle et non l'inverse」[注39)]。すなわち、哲学としての生き方――要するに〈生き方としての哲学〉――がまずもって先在し、それに基づいて哲学的な言説が生まれることになる。アドはこのことを以下のように表現している。

（…）哲学的な言説とは〈生の様式〉の観点la perspective du mode de vieのうちにつくられるものでなければならず、それはまた同時に〈生の様式〉を表現する手段le moyenである。さらにその結果、哲学とはなによりもまさに〈生き方une manière de vivre〉であって、むしろ哲学的な言説と密接に結びついたものである[注40)]。

アドによれば、〈哲学〉と〈哲学的な言説〉とは一方では「共約不可能Incommensurables」なもの[注41)]、つまり同一視されてはならないものである。なぜなら、それは意味内容における差異がはっきりと認められるからである。しかしながら他方、両者は密接な関係をもつものとしても位置付けられる[注42)]。すなわち、〈哲学としての生き方〉が言説化することを通じて〈哲学的な言説〉が生まれる。表現を変えて述べるならば、〈生き方としての哲学〉がいわば結晶化したものを〈哲学的な言説〉と捉えることも出来るだろう。なぜなら、〈生き方としての哲学〉が言説としてまとめられたもの、さらに遺されたものが〈哲学的な言説〉となるからである。

ところで、先にみたデカルトにおける〈哲学〉理解にとどまらず、アドにおける古代の〈哲学〉理解においても哲学の目標とは〈知恵の探求〉であることが示された。すなわち、体系化を期した〈哲学〉――アドによれば、それは中世に始まり近代にいたって明確な形姿をあらわすものである[注43)]――ではなく、主体の日常に対して確かな道標を与えるものとしての〈哲学〉である。アドの表現を借りて言うならば、〈哲学〉とは「生き方の技法un art de vivre」としてその姿を現すものであると言える[注44)]。ところで、目下〈哲学〉の概念的な実質を問う段階に至る〈体育哲学〉分野において、デカルトやアドにおける〈哲学〉理解は向後において〈哲学〉の実質を議論するための示唆を与えるものとは言えないであろうか。すなわち、体育やスポーツ、そして身体に対する認識論的な原理の追及を責務として自ら任じる〈体

育原理〉から、名称が〈体育哲学〉へと変更された。そして、〈体育哲学〉においてもその実質的な性格は〈体育原理〉のうちに確認された学的性格をなお色濃く残すものと言える。しかしながら、〈体育原理〉から〈体育哲学〉へと名称を変更したことの意義として研究内容の観点から指摘するならば、名称変更の意義とは原理論的な知を求める〈原理〉から生き方や主体のあり方を求める〈哲学〉への学問的な変革であることが期される。すなわち、体育やスポーツそして主体の身体における議論の基盤を提供する役割を担う〈体育原理〉の意義に加え、体育やスポーツにおける主体のあり方――言うなら〈生き方〉――に示唆を与えるような〈哲学〉が向後望まれるのではないか。別の角度から言えば、デカルトが〈原理〉と〈哲学〉の関係について論じたように、〈体育原理〉として体育やスポーツにおける認識論的な基盤を考察することにとどまらず、その原理をいわば出発点として体育やスポーツの場を生きる主体の〈あり方〉ないしは〈生き方〉に示唆ないし指針を与えるものとしての〈体育哲学〉である。そのことが明確な形姿をもってわれわれの前に立ち現われたとき、〈体育原理〉はいわば真の意味において〈体育哲学〉へと変貌するとともに、その名称――つまり〈体育哲学〉という名称――の実質が体現されているものと言うことができる。それゆえ現状の学問分野としての〈体育哲学〉は言うなれば変革の途上にあると言える――なぜなら、これまで述べてきたように未だ〈原理〉の性格を色濃く残したままであるのだから――のであって、主体における体育やスポーツに資する〈知恵〉をもたらす営みとして〈体育哲学〉はさらに進まねばならないのである。

Ⅴ おわりに

本論における考察の結果、明らかとなったのは次のことである。まず、体育学のうちでも哲学的な考察を担うものとしての〈体育原理〉分野は、欧米との意味内容の差異をふまえてわが国で研究の歴史が蓄積された。その実質は体育やスポーツの場における身体あるいは体育やスポーツに関するさまざまな論題に対して認識論的な基盤を与えるものであった。第二に、〈体育哲学〉と名称の変更されたことを踏まえて〈体育原理〉との概念的な差異について検討する試みが行われた。その手がかりとしてルネ・デカルトの著作『哲学原理』仏訳序文における〈哲学〉理解を参照した。その結果、〈哲学〉とは主体の実生活に対して資する知を提供するものであり、主体における〈実践の知〉を志向するものであることが示された。さらに、〈哲学〉概念におけるデカルトとアリストテレスの類似を手掛かりとし、古代における〈哲学〉理解に対しても検討の目を向けた。具体的には古代哲学史家であるピエール・アドの議論を参照することを通じ、次の知見が示された。すなわち、古代において哲学とは〈生き方の選択〉として存するものであり、〈哲学的な言説〉を生み出す土壌として位置づけられるものであった。すなわち、古代における〈哲学〉とは言論の体系化をまずもって志すものではなく、主体の生き方において体現されるものであったのである。以上のことから次の結論を本稿のそれとして提出することができる。すなわち、体育およびスポーツにおける認識の基盤を明らかにする〈体育原理〉の研究史的な蓄積を踏まえつつ――つまりそれらの研究史や研究の意義を向後もなお認めつつ――、体育やスポーツの場における主体のあり方に指針を具体的に示す役割を担い、それを積極的に打ち出すものが体育における〈哲学〉の実質、言うなら〈体育哲学〉の実質である。なぜなら、デカルトにおける〈原理〉および〈哲学〉の概念的な差異を確認しても明らかなように、〈哲学〉の出発点として〈原理〉が定められるのであって[注45)]、〈哲学〉は〈原理〉における知見をその思索における出発点としながら、主体の〈生き方〉に指針を示すものを打ち出さねばならないからである。そしてその思索を打ち出したときにおいて、言葉の真の意味での〈体

育哲学〉が成立すると言えるのである。

今後の課題としては、アドが指摘した〈生き方としての哲学〉の実質として、彼は〈精神の修練 Les exercices spirituelles〉をその一つとして挙げている[注46)]。すなわち、主体の具体的な精神（魂）そして主体そのものとしてのふるまい方の総体を彼はこの術語によって説明する。もしアドの思索に則るならば――そしてデカルトの哲学をも〈精神の修練〉の枠組みでとらえ得るならば――、向後はこの〈精神の修練〉の実質を体育やスポーツの学的探究においてどのように応用しうるかが課題として位置づけられるだろう。というのも、〈体育哲学〉とは体育およびスポーツにおける主体の生き方に示唆を与えるものとして立ち現れるものであり、その実質のうちに〈精神の修練〉は枢要な位置づけを担うと思われるからである。

注

注１）デカルトの著作からの引用はCharles Adam et Paul Tannery,（éd.）, *Œuvres de Descartes*, 11vols, Paris: J. Vrin, 1996. に拠り、巻数と頁数を併記する。なお必要に応じて次の校訂版を適宜参照した。René Descartes, *Œuvre philosophiques*, Tome I-III, Ferdinand Alquié（éd.）, Paris；Garnier, 2010. およびRené Descartes *Œuvres et lettres*, textes présentés par André Bridoux, Paris；Gallimard, 1953. René Descartes *"Principes de la philosophie première partie sélection d' articles des parties 2, 3, 4 lettre-préface"* Denis Moreau（tr.）Paris; J. Vrin, 2009, Descartes René, *"Lettre-Préface des Principes de la philosophie"* présentation et notes par Denis Moreau, Paris; Gf-Flammarion, 1996.

注２）佐藤臣彦「体育哲学の課題」『体育・スポーツ哲学研究』第**28**巻第１号、2006年、２頁参考。

注３）同上、2-3頁。

注４）高島平三郎『體育原理』大場一義編・解説『近代体育文献集成　第**4**巻』日本図書センター、1982年、1-2頁参考。

注５）川村英男『体育原理』（第**3**版）体育の科学社、1964年、７頁。

注６）同上、5-7頁。

注７）前川峯雄『体育原理』現代保健体育学体系1、1972年、大修館書店、4-7頁および15-23頁、66-72参考。

注８）たとえば阿部悟郎「体育学における人間学的基底の一端とその可能性の一方向―ジンメルによる「生の哲学」に基づいて―」『体育哲学研究』第**43**号　2012年、29-34頁参考。

注９）近年の研究では林洋輔『デカルト哲学における情念と身体運動：習性と予備修練に着目して』、同第**58**巻第２号、2013年、617-635頁、あるいは佐々木究『「physique」と教育：ルソー著『エミール』に着目して』同第**57**巻第２号、2012年、399-414頁などを挙げることができる。

注10）新保淳「科学論的視点から見たスポーツ科学における問題領域の検討」『体育哲学研究』第**38**号　2007年、15-28頁参考。

注11）Larousse *"Grand dictionnaire de la philosophie"*, sous la direction de Michel Blay, Paris：Larousse：CNRS, 2012, p. 799.

注12）小林道夫「心身問題―その所在と展開―」『心理学評論』第**37**巻４号、1994年、419頁参考。

注13）村上勝三『デカルト形而上学の成立』講談社〈学術文庫〉、2012年、170頁。

注14）1642年１月31日付けメルセンヌ宛て書簡（Ⅲ, 523）参考。

注15）よく知られているように、デカルトは当時用いられていたスコラ哲学の教科書と自らの記述を併記する形――いわゆる「エウスタキウス計画」と通称されるもの――での出版を試みたが、最終的にその計画は放棄された。詳しくは松田克進「デカルト心身関係論の構造論的再検討――「実体的合一」を中心として――」『思想』第**869**号、岩波書店、1996年、200-201頁参考。

注16）IX-B, 2.

注17）IX-B, 2.

注18）IX-B, 2.

注19）『方法序説』第六部（Ⅵ, 62）において述べられているように、デカルトが自然研究を推進することの目的とは、学問によって主体の健康増進や福祉に裨益することである。それゆえ『方法序説』で語られた自然研究に関するデカルトの思想は、『哲学原理』の仏訳序文においても読み取ることができる。なぜなら、「学問の樹」の構想のうちに『方法序説』にて述べられた医学が位置付けられるからである。

注20）IX-B, 2.

注21）IX-B, 2.

注22）IX-B, 2.

注23）IX-B, 2.

注24）IX-B, 10.

注25）IX-B, 3.

注26）IX-B, 15.

注27）IX-B, 15.

注28）IX-B, 14.
注29）『情念論*Les Passions de l'âme*』第三部第152項（XI, 445）参照。
注30）山田弘明『デカルト哲学の根本問題』知泉書館、2009年、301-328頁参考。
注31）「世界認識」と主体の生き方という二つの課題をデカルト哲学が引き受けるとの言及については、野田又夫『哲学の三つの伝統』岩波書店〈岩波文庫〉、2013年、65頁参考。
注32）これらの著作が確認される1620年代のデカルトにおいては、その認識論においてアリストテレスの影響を脱するに至ってはいない。このことについては小林道夫『デカルトの自然哲学』岩波書店、1996年、11-28頁。
注33）Frédéric Buzon et Vincent Carraud, *Descartes et les «Principia» II Corps et mouvement*, Paris; Presses universitaires de France, 1994, pp.21-22.では、デカルトの〈知恵〉の定義がアリストテレスの『形而上学*Métaphysique*』第一巻第一章の記述（981b28-29）――「知恵と名付けられるものは第一の原因や原理を対象とするものであるというのがすべての人々の考えているところであるというにある ὅτι τὴν ὀνομαζομένην σοφίαν περὶ τὰ πρῶτα αἴτια καὶ τὰς ἀρχὰς ὑπολαμβάνουσι πάντες」との箇所――との関連のもとに議論されるべきものであることを指摘する。本稿も彼らの議論に与するものとしたい。なお上記アリストテレス『形而上学（上）』の訳出は出隆訳　岩波書店〈岩波文庫〉、2006年、25頁のものによる。
注34）この点については、Marleen Rozemond, *Descartes's Dualism*, Cambridge：Harvard University Press, 1998, pp.102-138を参照。
注35）Pierre Hadot, *Exercices spirituels et philosophie antique Troisième Edition* revue augmentée, Paris：Institut d'Etudes augustiniennes, 1993, p.218.
注36）ibid., p.218.
注37）ibid., p.218.
注38）ibid., p.218.
注39）Pierre Hadot, *Qu'est-ce que la philosophie antique ?*, Paris：Gallimard（Collection Folio/essais）. p.18.
注40）ibid., p.19.
注41）ibid., p.266.
注42）ibid., p.268.
注43）Cf., Pierre Hadot, infra, p.223.
注44）Pierre Hadot, infra, p.225.
注45）Cf., IX-B,2.
注46）Cf., Pierre Hadot, *La philosophie comme manière de vivre Entretiens avec Jeannie Carlier et Arnold I. Davidson,* Paris：Albin Michel（biblio essais）, pp. 144-158.

文献

1）阿部悟郎：体育学における人間学的基底の一端とその可能性の一方向―ジンメルによる「生の哲学」に基づいて―，体育哲学研究，**43**, 29-34, 2012.
2）Adam, C., Tannery, P.,（éd.）Œuvres de Descartes（11vols.）, J. Vrin, Paris, 1996.
3）アリストテレス：形而上学（上），出隆訳，岩波書店，**25**，2006.
4）Buzon, Frédéric et Carraud, Vincent, *Descartes et les «Principia» II Corps et mouvement*, Paris：Presses universitaires de France, 1994, pp.21-22. Presses universitaires de France, 21-22. 1994,
5）Descartes René, *Œuvres et lettres*, textes présentés par André Bridoux, Paris；Gallimard, 1953.
6）Descartes René, "*Lettre-Préface des Principes de la philosophie*" présentation et notes par Denis Moreau, Paris；Gf-Flammarion, 1996.
7）Descartes René, "*Principes de la philosophie première partie sélection d'articles des parties 2, 3, 4 lettre-préface*" Denis Moreau（tr.）Paris; J. Vrin, 2009.
8）Descartes René, *Œuvre philosophiques,* Tome I-III, Ferdinand Alquié（éd.），Paris；Garnier, 2010.
9）デカルト，ルネ：山田弘明他訳，哲学原理，筑摩書房，12, 25f，2009.
10）Hadot, Pierre. "Exercices spirituels et la philosophie antique", Paris：Institut d'Études Augustiniennes, 218, 223, 225, 1995.
11）Hadot, Pierre. "Qu'est-ce que la philosophie antique ?", Paris: Gallimard（folio essais），18f, 266, 268, 1995.
12）Hadot, Pierre. "La philosophie comme manière de vivre", Paris：Albin Michel（biblio essais），144-158, 2001.
13）林洋輔：デカルト哲学における情念と身体運動：習性と予備修練に着目して，体育学研究，58（**2**），617-635，2013.
14）川村英男：体育原理（第3版），体育の科学社，東京，**7**，1964.
15）木庭康樹：プラトン哲学におけるソーマの原理的特性，体育学研究，48（**5**），555-572，2003.
16）小林道夫：心身問題―その所在と展開―，心理学評論，37（**4**），419-436，1994.
17）小林道夫：デカルトの自然哲学，岩波書店，東京，11-28，1996.
18）Larousse "*Grand dictionnaire de la philosophie*", sous la direction de Michel Blay, Paris: CNRS, 799, 2012,
19）前川峯雄：体育原理，現代保健体育学体系1，大修

館書店，東京，4-7，15-23，66-72，1972.
20）松田克進：デカルト心身関係論の構造論的再検討――「実体的合一」を中心として――，思想，869，188-205，1996.
21）村上勝三：デカルト形而上学の成立，講談社，東京，**170**，2012.
22）野田又夫：哲学の三つの伝統，岩波書店，東京，**65**，2013.
23）Rozemond Marleen，*Descartes's Dualism*，Cambridge: Harvard University Press，102-138，1998.
24）佐々木究：「physique」と教育：ルソー著『エミール』に着目して，体育学研究，57（**2**），399-414，2012.
25）佐藤臣彦：体育哲学の課題，体育・スポーツ哲学研究，28（**1**），1-10，2006.
26）新保淳：科学論的視点から見たスポーツ科学における問題領域の検討，体育哲学研究，**38**，15-28，2007.
27）高島平三郎：體育原理　大場一義編・解説『近代体育文献集成　第4巻』日本図書センター，東京，1-2，1982.
28）山田弘明：デカルト哲学の根本問題，知泉書館，東京，301-328，2009.